

【福島大学むらの大学アーカイブ 27】 【大熊 Chapter8】

ナシで作った輪

伊東フヂノさん 伊東光子さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 2024年9月24日・伊東さんご自宅

第2回インタビュー 2024年11月30日・伊東さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類 新井咲姫瑛

行政政策学類 佐藤雅哉、佐藤愛晴

担当教員 鈴木敦己、実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

昭和24年に大熊町に嫁いできた母フヂノさんと娘の光子さん。震災前までは様々な品種のナシを栽培。相模原や鶴ヶ島に避難後、現在はいわきに在住。

【第1回インタビュー】

ーフヂノさん、光子さんの生い立ちについて教えてください。

光 子：うちの母は葛尾から、そこからお嫁に来た。

フヂノ：10里（≒40km）。ハハハ。（葛尾からのお嫁は珍しいけど）親戚だから。おばちゃんのうちに来たから。

光 子：いところで。

フヂノ：平成（正しくは、昭和）24年か、大熊町に葛尾から来たんだ。

光 子：嫁に来たときは、今のあそこ（下野上）のうちだったんだよね。

フヂノ：そう。ナシもまだ棚も何も上げてなかった。終戦、20年でしょう？ そのころに苗木を植えたの。

光 子：開拓であそこに入ったから。

フヂノ：国の土地を借りてね。だから、私、嫁に来たときには、まだこんな棚も上げてなかったの。植えたばかりで。少しあったけど。やっぱりナシ畑が多かったから、ずっと原のほうにはナシ畑がいっぱいあったの。だから、うちの先祖もそれをやりたくて始まったんです。みんなの仲間に入って。じいちゃんばあちゃんはな。北海道の開拓に行ったんだけど、寒くて寒くて、実らないんだって、小豆でも豆でも。そして諦めて、6年間、北海道にいて、で、大熊町に帰ってきて。だから、ひどかったよ、うちら嫁に行ったときは本当にひどい畑だった。フフフ。石がひどいね。カヤ株でも……（石がごろごろで、）子どもものうちから石拾いやらせられる。

ーフヂノさんが所有している土地は貸して誰かに貸しているのですか？

光 子：はい。

フヂノ：Hさんっていう（大熊に移住した若い農家の）人。

光 子：（息子の同級生の）つながりから。

フヂノ：キウイやってな、畑さな。

光 子：うちとしても、畑、だんだん、なんていうの、町でね、草刈ったりなんだりとか、そういうのがやってくれなくなるから、ちょうどよかったといえばよかった。

ー大熊に移住した若い農家の二人はフヂノさん、光子さんから見てどのような人ですか？

光 子：なんかいい人たちみたいで。

フヂノ：和歌山県の人だっていった。

光 子：そうそう。Hさん……あの人、なんていったっけ。Aさん。あの方は神奈川。私の主人が横浜育ちだったから。シティーボーイ。こっちになじんじゃって。

ーナシを育てることになった経緯について教えてください。

光 子：私は（伊東家の）娘です。主人はお婿さんに入ってもらったから。だから、（母は）大熊に六十何年住んでたっていうけど、私も60年近く住んで。女3きょうだいの三女。

フヂノ：継いでくれたから、私ら助かったの。姉ちゃんたちに逃げられたから、最後に残ったの。

光 子：それぞれいるって言ったは言ったんだけどね、なんだか行っちゃったの。ずいぶん、最初のころは田んぼ、畑……いろいろやったよね。

フヂノ：クリ植えたの、最初はね。うん。そのクリの後で、今度、モモも植えたの。モモ。モモは、木の寿命がなくて、20年なんてやったかな。

光 子：そのころはよくわかんない、私は。

フヂノ：モモはおいしくてとてもよかったんだけど、木の寿命がないのね。虫くっちゃってだめなの。

光 子：木がだめになると、その土地自体もあんまりよくないっていうんだよ。

フヂノ：で、ナシにしたのね。田んぼは元はなかったのね。畑だったんだけど、田んぼも欲しくて、開墾して1町歩ぐらい田んぼをつくったんだね。そのときも石がゴロゴロだから、ナシの木でねえ、田を植えても両方から抱えねっかひっくり返っちゃう。ところが、この田んぼも、なんぼ、5年でねえ、10年になんねが。コメ取れるようになってから、コメよりナシがいいどなって、5反歩ぐれえナシ植えたんだな、田んぼに。

光 子：田んぼが、5年どこじゃない、やったのは。もっと田んぼはやってたんだけど、減反政策ってあるんだ。その時代になってきて、それで、田んぼもそんなに、「コメいらない」になったからナシにしようかっていって。

フヂノ：5反ぐらいナシを植えたんだな。

光 子：（自宅の航空）写真、昔、農協さんで撮ったんだね。ここが田んぼだったんだけど、ここにナシの木を植えて、こっちはずっとナシ畑で、こっちの上のほうにモモ畑があつて。この辺もちょっとモモ畑もあつたんですよ。モモ畑の記憶は私もある。

フヂノ：モモもおいしかったんだ。おいしかったんだ。

光 子：開墾でいちばん最初、先祖さんが入ったときは、ここまで……ここまでか、あつたんですよ。それを……

フヂノ：隣にな。

光 子：うん。ちょっと遠い。

フヂノ：5町では多いからって。

光 子：（土地を）取りすぎだっていわれて。

フヂノ：2町歩を隣に渡して、残ったこっちが3町か、3町だね。

光 子：こっちが新しい、こっちが古いんだ。ナシ畑かなんかやってるから、ここに大きな物置つくったの。この2階の部分に。息子の友達が中学校の帰り道（に来てたまり場になっていた）。

フヂノ：通るから。

光 子：たぶん帰る途中で。

フヂノ：耕作してたの、あれ、最初はな。国の借りて作ってたの。だけど、やっと自分のものに、制度だの変えてくれたのな。

—フヂノさんの生い立ちについて教えてください

フヂノ：（一番小さいころの話は）葛尾？ 小学校の頃？ いちばんちっちゃい頃は……

光 子：葛尾で過ごした記憶。

フヂノ：雪降るからそり乗りしてた。女でも。フフフ。道路の雪たまったら、傾斜の道路あつから、その上からそり乗り。前が畑だったから、雪積もれば、スキー場にもなる。

光 子：その頃、行ったことないんだからわかんないね。

フヂノ：子どものころって、舟木一夫の、何だっけ、あれ、高校一年生だ。一年生でねえ、『高校三年生』だ。

光 子：ああ、ああ。葛尾の(母の)実家にいってね、歌った話ね。

フヂノ：5歳の子、歌うたってじいちゃんにお金もらって喜んでんだ。ハハハ。

光 子：小遣いもらって。タバコ作ってたんですよ。

フヂノ：タバコが主な農業だったのね。タバコの仕事は子どももできるから使われた、ちっちゃいうちから。

光 子：二十歳前に来たんだっけか？

フヂノ：ほだ。二十歳の……

光 子：大熊に、二十歳になって、大熊に来てから二十歳になった。

フヂノ：大熊で成人式やってもらった。結婚式にはトラックで来た。トラックで。ハハハ。（嫁入り道具を）後ろさ積んで。助手席さ嫁さん乗って。何もないもの、ほんだってこっちに。

光 子：すごい有名。だって、そのときにトラックで来たんだって、車で来たって。

フヂノ：トラック、トラック……

光 子：馬車でも。歩いてくるっていう人もいるのに。

フヂノ：だって、10里あるからな、10里。

光 子：というか、車も何もないから歩くしかなかった。

フヂノ：馬車だ、馬車。

—ナシを育てていくうえで大変だったことを教えてください。

光 子：ナシ、作るまでにはいろいろ大変だったよね。

フヂノ：いや、ほんとに、苦労したって、そんなの今は忘れるんだな。

光 子：今、（ネットで検索して）こうなってるじゃないですか。昔は梨畑の棚が竹だったから。

フヂノ：竹だったから。

光 子：竹を使って、わらで……

フヂノ：縄もじって。梨の枝を曲げて、それ結わえつげなっかなんねがら、ナシはね。

光 子：縄も……縄、わかりますよね。縄も自分ちで作ったんだよね。

フヂノ：細い縄も、残業にやって。残業にね。

光 子：パタンパタンって足でやると、わらを入れる場所があつて、そこに入れながらパタンパタンとやっていると、こういうふうにな（長いのに）なって出てくる。そうそうそう。

フヂノ：細くやんねっかだし、棚縛るのにはな。太くてはだめだから細くする。

光 子：消毒だって昔……今は機械に乗ってこうやって後ろでビーってやるけど、昔はうちでタンクみたいなのがあって……

フヂノ：こんなちっちゃい発電機あってな。それで……

光 子：そっから引っ張ってって、ホースつないでいって、ホースでこうやってやったりして。いやいやいや、そのときはまだここまで広くなかったから。

フヂノ：前は、人間の力でポンプもんでな、そして、消毒、ナシをしてたんだけど、こっちは疲れてっから居眠りすっぺした。これ、やってて、「こらー!」、ハハハハ。「出ねえがー!」なんて。

光 子：何だろうね、あとはね。昔は……

フヂノ：ナシも棚網大変だったんだ。棚網……、網。

光 子：網掛けるようになってきた。昔は網なんてかけなかったんだけど。中学ごろかなあ、網掛けるそういう、周りもそういうことするようになって、防鳥の網。

フヂノ：網掛ける棚、上に針金張るの。

光 子：もう一個上に針金が渡ってて、ここにワイヤーが、太いワイヤーが渡ってあるくのがあって、そこを伝って網、上からピーツと上げてずっと引っ張ってって、この長さが、そのころは50メートル以上あったんで、そこは、上のワイヤーにつかまり、下の……

フヂノ：片方の手でやんなっかなんねがら。

光 子：ワイヤーにのっかって。

フヂノ：私やったよ、80才まで。

光 子：震災の年まで上ってたの。網掛けか。

フヂノ：片方はつかまってる。片方の手でこうやって。

光 子：畑が2つに、昔からある畑と田んぼに作った畑が。田んぼに作ったほうは2人でなんとか上げたんです。で、大きいほうはちょっとさすがに長いから、その分、網も重いし、ほんで、みんな息子の友達が手伝いに来たり。

フヂノ：手伝いに来てくれた。

光 子：(Nちゃんも) やったかな。

フヂノ：Nちゃんは来なかったか。

光 子：Kちゃんは毎年来てた。

フヂノ：E君は。

光 子：その時は町区(に住んでいた)。そうそう。中島時計屋さん。あの一角のすぐ脇んところに。最近は年に1~2回来るね。夜帰るっていうから、「危ないから泊まってけ」。フフフ。私のきょうだい、うちの姉たちの夫婦も来てくれたりとかね、みんなでもうお祭り騒ぎのようだ。それが7月の暑い盛りにやんなっかなんねえの。そう。

フヂノ：網上げは大変だったな。

光 子：麦茶のおいしかったこと。冷たくあれして。

フヂノ：それで、台風来るとポーッと吹っ飛ばしてしまうんだ。そう。田んぼのほうまで網吹っ飛ばしていくから。

光 子：台風来るとね、ナシは大変だ。ちょうど台風来るときは、「豊水」っていうナシ、「豊かな水」って書く、そのころ、なるころに台風が来るんだよ。そのナシって軸が弱くて、ちょっと強く振れたりすると落っこっちゃうの。

フヂノ：あったな。一面に落っこちて、機械で潰してあるった。

光 子：落っこっちゃったの商品になんないからどうしようもなく、草刈る機械とかなんか使ってジャーって潰しちゃって。

フヂノ：いろいろあったんだ。

光 子：そのままにしておけないから。昔は網も張んなかったんだけどね。袋かけが多かったね。品種がだんだん変わっていったから、作ってる品種が。最初のころは……

フヂノ：袋かけやったけど、最初はな、二十世紀の。

光 子：長十郎、八雲？

フヂノ：八雲はずっと前だ。

光 子：二十世紀。

フヂノ：長十郎と二十世紀。あと、新高。

光 子：この辺は最初のころからある種類で、そのあと幸水、豊水……

フヂノ：幸水、豊水。

光 子：あと、「あきづき」っていうのも、「あきづき」っていうのが、もうそろそろ商品として出せるなっていうときに震災だった。もう10年も離れてるから、新しい品種もいっぱいあって、「えっ、こんなナシあるんだ？」って。「秋峰」っていうナシは作ってて、それはやっぱり……

フヂノ：1個で1キロあったな。

光 子：1キロぐらいあるナシ。それ、袋も何もかけない、支えも何もしないでも落ちないんです。そのまま1キロのやつ。

フヂノ：秋峰はな。1個で1キロになんの。

光 子：最初に面白いのがあるの。晩三吉（ばんさんきち）って言って、あれ、本当の名前じゃないのかな。

フヂノ：わがねげんとな、あれはすっばいげど。

光 子：うちでは晩三吉って聞いてたんだけど。

フヂノ：実はやわいんだけどな、すっばいんだ。

光 子：古い、なんていうの、収穫してからすぐ食べるんじゃないくて、少し置いといてお正月ごろ食べたり。

フヂノ：すっばいからな。山形はブドウか。

光 子：ブドウはあるけど、あれだね、ラ・フランスとかなんか洋ナシもあるよね。洋ナシはやってない。やんなかった。

フヂノ：ほかにはあったけど。Iさんところではやってたんだわな。

光 子：五差路のこのナシ畑。

フヂノ：あそこももとは田んぼだったから。

光 子：そのころ田んぼだかなんかをみんな、5軒ぐらいかな、5軒ぐらいで借りて、そこを全部洋ナシ。でも、種類は何種類か。同じ種類じゃなくて。レクチェあったね。なんか4～5種類あったよ。

フヂノ：とろい人の事ラ・フランスって。「ようなし」だって。

光 子：洋ナシは袋かけるんだよね。で、私とすぐ上の姉は、わりとナシ屋さんの中では袋かけ早いほうだったの。手伝いに来てって…。

フヂノ：あてにされてたな。今考えてみっとナシも大変だったな。

光 子：そうね。だから、本当に子どもたちが中学生・高校生になったころは、友達来ると、地方発送用の箱が、ダンボールたたんであって仕入れるから、それを組み立てなきゃなんない。それを、高さがいろいろあるから、100のやつは何箱、200のやつは何箱って頼んで作ってもらった。やってた。息子に文句言われるけど。ハハハ。「手伝った、手伝った」っていわれて。ハハハ。

フヂノ：友達は、H君の友達も来たしな。

光 子：そうそう。下の子の友達も。高校生ぐらいになるとね、綱掛けするときもすごい役に立つんです。がっしりしてるし、背もそこそこあるし、力もあるから。

なんかたまり場になってたのね、子どもね。ハハハ。あと、消毒もあれだけど、今は消毒機械って、この前、2年ぐらい前かな、福島農家で、ナシも作っててバラをやっているという佐藤という農園があって、そこに行ったら、消毒機械が屋根ついてるんだ。屋根つきの。

フヂノ：ナシの木の下、歩くのに、屋根ついてたらな。

光 子：私も父親が平成……

フヂノ：14年に亡くなったの。

光 子：その前、4～5年、ちょっと寝込んだりして、その辺から私が機械類全部やるようになったんだけど……トラクターでも何でも。田んぼの肥料入れも何でも、草刈りから……やるしかないから。

フヂノ：田植え機械でも何でもな。

光 子：私の旦那さんは海外出張が多くてうちにいなかったんですよ。だから、結局、あてにできないから。

フヂノ：消毒やんのは大変だったな。

光 子：消毒やんのも草刈るのも、最初は「どうやって動かすんだろう」って感じで。

フヂノ：ドッキングもやったから。

光 子：肥料を、池あった脇にちょっとこうやって、今、駐車場みたいになってるところ、あそこに堆肥を……そうそう。あそこに堆肥をやって、そこから堆肥を、なんていうんだ、すくうやつですくって、機械ね、トラクターにくっつける、アタッチメントか、やって、それで、後ろにこっちの別な。トラクター3台ぐらいあって。

フヂノ：農薬と、肥料ふるやつとか……

光 子：いちいち交換できないから。「このトラクターは何、このトラクターは何」って感じで、

それでやって。それでやって、自分で肥料載っけて田んぼの中を走ってあるくと、後ろの機械がダーってなって肥料ふるわけ。それ、ナシ畑もやったけど、ナシ畑は大変だったのが、棚があるじゃないですか。引っかかると大変だから、トラクターに乗っとうこういうような状態でやってたの。

フヂノ：袋に入った肥料だって、200袋ぐれえはふったからな。

光 子：木の周りの草刈りは、草は、うちの母が背負って、消毒機械背負って。

フヂノ：消毒でねえ、除草剤。

光 子：父親ができなくなったときは、ちょっとだいぶ苦労したね。

フヂノ：父親も寝たきりで4年もいたからな、そのあいだが大変だったな。お父さんはいないべし、外国さ行って。

光 子：私は最初、手伝い程度だったんだけど、だんだんと。主導。

フヂノ：剪定だってみんな2人でやったもん。ナシの剪定は大変なんだ。剪定のせいでな、来年なっかなんねが決まるからな。

光 子：機械やるのも大変だったけど、ナシ、果樹組合ってというのがあって、その果樹組合ではときどき集会があるんですよ、会議……会議っていう会議でもないんだけど、そこに、私、行かざるを得なくて行くでしょう？ そうずっとみんな男の人で、ポツンと。

フヂノ：30人はいたか？

光 子：30人……昔、最初、なんていうの、ばあちゃんたちが始まって、今はなくなったけど、50軒ぐらいあった。

フヂノ：最盛期にはな。

光 子：でも、震災前は30軒もないくらいだったな。（紅一点で目立ってしまうから）そこはちょっとつらかった。消毒のあれも、薬を班ごとにボンと来て、そこで集まってまた薬分けするんだけど、最初、何薬がどうだかっていうのが全然わかんないから、紙持ってこうやっていったら、「ずいぶん勉強家だごど」みたいな、ハハハ。皮肉を言われたりして、ちょっとつらかったかな。でも、そのうち慣れてきてみんな面倒見てくれたので、困ったときはちゃんと手伝ってもらって。

フヂノ：ナシ売りもしてあったからな。売り方。最後にな、クズナシ。

光 子：それもあったんだけど、収穫時には収穫はしなきゃなんない、パートさん頼むから、パートさんのこともやんなきゃなんない。だけど、ナシも売んなきゃなんない。お客さんが来たらお客さんの相手もしなきゃなんない。だから、もう、すごかったですね。で、注文、頼まれると、そのころパソコンでパンパンパンなんて送り状に打てないから、全部手書き。夜中まで書いて。

で、朝早く起きて、まず、お茶の用意して、パートさん来るからお茶の用意したりなんかして、全部、出かけるまでの準備して、収穫をやって、11時ごろになると、今度、昼間とかなんかあちこち、会社にお昼休みをめぐらして売りに行く。あんまりちょっと、ハネもの的なものを。いいやつじゃないの、ちょっとハネたものを袋に入れて、それを売りに行かなきゃなんない。1人で。それで、お昼になるころにその会社に着くように行って、

でも、結構全部売れちゃうのね。で、帰ってきて、今度また普通の収穫の仕事して。

フヂノ：おみやげに頼まれたの出さなきゃなんねえがら。

光 子：地方発送。地方発送用のを今度やんなくちゃなんなくて、その粒分けはうちの母親が。

フヂノ：これはなんぼ、これはなんぼって振り分けする。私。大ききでここに詰めっから。大きき一定じゃないと重さが一定しないから。目だ、目。

光 子：（型にはめたりとかしてるよりは）目と手の感覚。

フヂノ：目と手の感覚だけ。手だけ。

光 子：うちにそんな選果機があるわけじゃないから、みんな選果は。選果から外れて、私が売りに行くナシとか、それでもだめなやつとかに、ハネものを分けるのも。

フヂノ：「これは牛にやる、これは人にくれるやつ、これは売れるやつ」って分けるんだよ。ハハハ。もう売り物にならないから。ちっこいやつとか……牛にやるんだ。よそのうちにくれるわけ。「たまったよ」っていうとハ、取りに来るんだ。

光 子：食べすぎてもだめだけどね。食べるのは結構。

フヂノ：いろいろ思い出したわ、しゃべってると。

ーナシの木は何本ぐらいあったんですか。

フヂノ：500本くらい。1町5反だから。

光 子：保険をかけるっていうことがあって、ナシの被害あったときのために。そのためには、何本あるかっていうのも数えなきゃならない。一生懸命数えて。自分たちでそんな把握してなかったから。500本以上あったね。

フヂノ：500本はあったね。

光 子：植えた1本から、ちゃんと成木になって取れるようになると500～600個なるから。

フヂノ：1本の木にな。300から400（個の実がなる）。

光 子：それだけ結構広く、この面積ぐらい1本の木で。

フヂノ：広がっちゃうから。

光 子：四方八方に。

フヂノ：いいのも悪いのもあるからだけど。

光 子：いいのだけなればいけど。

フヂノ：この木にはなんぼならせるってだいたい標準があるわけ。

光 子：少ないところでも300。

フヂノ：300はならせたな。

光 子：なんないと。だいたいナシの木でこのぐらいは太くなってたから。（パートさんは）5～6人いたかな。

フヂノ：パートさんが自分の都合で来るから。何時に来て何時に来るって自分でつけてくの。

光 子：うちだけでなくって、ほかのナシ屋さんもやっぱ。

フヂノ：花粉付けもな。花粉付けが大変なんだよ。

光 子：花粉付けも書いといたほうがいい。花粉って、昔、私たちが子どものころは、梵天（ぼん

てん)、耳かきの綿の部分を……こっちのナシで花をつけて、同じ種類じゃないほうがいいから、別な種類のナシの花にこっちでつけて、こっちでつけてってやってたんだけど、私がやるようになったころは機械化されて。「ラブタッチ」っていう機械。ちょっとしたモーターのある機械、製制する機械があって、先っぽがダチョウの羽がくっついてるんだけど、それが花粉がずっと上がってきて出るようになってるのね。羽のところで、今度、だけど、その花粉は売ってないの。花粉を作んなきゃなんないんですよ、うちで。

フヂノ：それが大変だ。

光 子：花粉を作るのには、ナシのつぼみ。

フヂノ：今、開花しようっていうのを摘んでいぐの。

光 子：つぼみを取って。つぼみで取って、全部おしべだけにして、おしべをある程度の湿気と温度のあれで、人工的に花粉を出させて、それを今度また選別する機械があって、それで花粉を作って、それだけでは足りないから、なんていったっけな……

フヂノ：ふやすやつな。

光 子：ふやすやつ、増量するっていうのがあるんだけど、それと混ぜて、それで機械に入れてやるんだけど。最近はなんか、でも日本でまだちゃんと作っては売ってないんじゃないかな。(輸入品)かもしれない。私らはやめてから10年も過ぎるから違うかもしれないけど。

フヂノ：困ってて、その場所でいっぱい作っとこあったがらな。機械だけでやるには足りないから、自然にできるやつ。うちはあったから、もとの風呂場、外にあったのね。

光 子：そう。で、消毒するときはあそこの池で水をくんでやってた。でも、大熊町って結構1軒のうちにやってる面積は多かったから、うちは1町歩、1町歩半近くあったんだけど、それで真ん中へん。うちの倍くらい、倍以上やってた人、結構いて。うん。だから、その販売的な……結構、いわきの人たちは面積が違うっていうか、やってる面積が少ないからだかなんか、結構、自分ちで売って、値段もそこそこ取ってたみたいなんだけど、大熊町って、独禁法に引っかかるからだと思っただけど、一応、ナシの定価表っていうのがあって、「いくらいくら以上」って。最低価格みたいなやつだったんだけど、だいたいどのうちでも最低価格でしか売ってないの。あんまり、商魂たくましい人が少なかったんだらうね。一般的に、これだけ買ってこಂಡだけサービスで、このぐらいの袋にいっぱい入ってるんだから。一緒にくっついてきた人にまであげて。

フヂノ：今でも言うよ、「いや、もらって食ったもんな」って、「どこでもくれたもんな」って。

光 子：いわきで、知り合いの人が買うっていうから、一緒について行って、ちょこっと買ったんだけど、1個もらったんだけど、それがちょっと虫食ってたりして。大熊にいるところは虫食ったのなんてそんなにくれられなかったよね。

フヂノ：くれらんに。形悪いのはくれるんだけど。

光 子：そんな時代あったね。

フヂノ：最後に今度、2人して車さ乗って売ってあるくの。川内のほうまで行ったよ。

光 子：最後、うちのばあちゃん、楽しみでもあって。葛尾にも行ったし。

フヂノ：「ナシはいらねが」って恥ずかしくて言わんにがった、前はな。

光 子：櫛葉はあんまり売れなかったね。なんか知らないけど。うちの長女さんが広野にいるんで、広野ではよく買ってもらったね、うちの姉が売ってくれたから。

フヂノ：11月な。

光 子：忙しいっていえば忙しいんだけど、遊びもしたんだよね。

フヂノ：何かあればハ、それ終わって旅行だ。

光 子：全体の仕事が全部終わるっていうのはあれだけど、1つの……。剪定はだいたい11月から1月末、2月近くまで。剪定の時期で。

フヂノ：2月までかかるな。

光 子：それから4月の初め、3月いっぱいやんなっかなんねえんだけど。

フヂノ：ただ、縛んねっきゃなんねの。ゆわえつける。

光 子：誘引。それをして、ちょっとすると今度、消毒始まったりしなきゃなんなくて、それから、花咲くから、今度は花粉付けをして、花咲くのが5月、だから4月の終わり……

フヂノ：田植えしねっかなんね。田植え終わったら実すぐりだ。摘果。

光 子：摘果がだいたい6月、収穫まで何回も。

フヂノ：4回ぐれえは回るな。

光 子：収穫始まりが8月の末で、なんだかんだ10月いっぱいしかかったんだな。その間に、今度、肥料も入れなきゃ。11月ごろだな。収穫終わりに。

フヂノ：葉っぱ落ちたら剪定始まるんだな。

光 子：だから、年中仕事はあるんだけども、仕事と仕事の合間って1～2日、何日間かあるじゃない。そのときに、「じゃあ、どっか行こうか」って。ハハハ。で、収穫終わったときも、やっぱりパートさんとか、うちのきょうだいたちもいっぱい手伝ってもらったんで、連れて、どっか。

フヂノ：1泊旅行な。

光 子：1泊、日帰りだったり。パートさんは1泊はなかったけど。そんなのやって。収穫んときは、だから息子の友達がいっぱい手伝って。ある子もよく来てて、あそこ、うちにいるよりうちに来てたほうがよかったんだかなんだか……。幸楽苑って大熊にあったんだけど。そうそう。「会津っぽ」。そこでパートしてた、アルバイトしてたんだけど。仕事、パート終わって帰ってくるとうちに来て。

—震災に関して教えて下さい。

フヂノ：棚縛りやってたんだよ。

光 子：ナシの棚縛、誘引ね。棚に伸びたやつを全部。ナシの木って黙って放っておくとずっと上に伸びるんです。それを無理やり棚にゆわえつけるわけ。その時期（震災時）は、2人で畑にいたんです。

フヂノ：そうしたら、「あららら」って梨の木につかまってた、こう揺れたから。そして見たら、瓦の屋根が落ちるの見たんだよ。揺れてっからハ。瓦が落ちるの見たの。

光 子：瓦ってぐしのほうだな。ぐし、わかります？ 瓦屋根のいちばん上にあって、瓦がこうあ

るじゃないですか、この部分。上のこの部分。それが落っこってきちゃって、「これ、どうしよう。直すしかないな」みたいな。

フヂノ：パパ（長女の旦那さん）って大工さんなんだよ、旦那が。「パパに頼んでやってもらわねっかしょねな」っていったら、隣の組の人がまわってきた、「避難しろ、避難しろ」って。地震になったときな。

光 子：私も婦人会のほうの役員もやってたんで、じゃあ、下の集会所に1泊ってういか、お年寄りとかなんか避難させて、みたいなのがあって。

フヂノ：公民館にな。

光 子：だから、そのまま……そのままってういか、行って、で、一晩、あそこの集会所に泊まって、ずっと地震続いてたしね。

フヂノ：バス30台も、乗って逃げるっていわれたけど、1台も来ないんだもんね。

光 子：バスなんて来なかった。結局、朝になって、「やっぱりここじゃだめだ。また避難しなさい」ってことになって、バスは来ないから、マイクロバスとかなんか持ってる人は乗り合いで、「とにかく西へ行ってください」って。「どこどこ」じゃないんですよね。

フヂノ：「西へ行ってください」って。

光 子：「西へ行ってください」って感じで。ほんで、うち、その当時、ワゴン車に乗ってたから、じゃあ、近所のおじいちゃんとおばちゃんと、あと友達と、友達とおばあちゃんは親子だったから、あと、おじいちゃん1人乗せたんだけども……うちで3人、6人だな。6人で出たんだけど、うちの息子が運転していったんですよね。で、そんなとき言われたのが、出るとき言われたのが、ピストン輸送だと。「それ1回置いたらまた戻ってきてね」っていわれて行ったわけ。だけど、何台か連なって行ったんだけど、途中で田村のセブンイレブンでちょっとトイレに寄ったら、ほかの人はもうどこに行ったかわかんないのね。で、ずっとそこまで行くあいだに、田村の体育館、あそこで入れるような感じだったから、結局、そこに戻って、私たちみんな降りて、息子はいったん戻ったの。（他の人を連れて来るために）戻ったんだけど、都路まで行ったんだけど、そこからもう入らないでくださいって。そこから入れないっていわれて、また戻ってきて、一緒にまたその（田村の）体育館ですごしたんだけど。

フヂノ：寒かったんだ、あの晩な。

光 子：息子は風邪ひいてたの。寒くて。

フヂノ：「ばあに布団引っ張られたから、俺、何にもなかった」って。

光 子：私は集会所に行くときに、うちにあるちょっと、なんか持ち寄りがあったから、そういう毛布だったりとか、発電機動かすのにガソリン、うちに車を動かしたりなんだから、ちょっと買い置きあったから、それを持ってって、「あとで返すからね」とかいわれて。ハハハ。ほんで持ってって、その当時、ちょっと残ってたナシもあったから、晩三吉とかあれだな、それを持ってったりして、食べるものないから、で、いたんだけど、結局、次の朝も避難っていうことになって行って、体育館に寝たけど、本当に今の避難所だと、ダンボールだの……ちゃんとあれしてるけど、その時はなかったから、みんなで雑魚寝状態

で、持ってった毛布とかを掛けたんだけど、寝てるときに寒いから毛布引っ張って、息子はこうやって。ハハハハ。やろうと思ってやってるわけじゃないですけど。

フヂノ：寒いから引っ張るのな。毛布1枚はもらったんだ、その晩ね。1枚では……

光 子：でも、そんなときの夜に、息子の友達、やっぱり第一原発で働いてたから、なんか、仲間の人が、「今夜のうちにそこから出なきゃなんないかもしれないよ」みたいな話は聞かされたみたいなのね。その晩は、避難、別のところにするってはいわれなかったんだけど、その時点（原発が）爆発してたんだよね。

フヂノ：（県外の人）は）テレビさ映ったもんな。

光 子：テレビなんか見れなかったから、全然。どういう状態がわかんない。津波の状態もわかんない。ただ単に避難しろっていわれたから、ほとんど作業してるままの状態で。（震災直後）で、ばあちゃんは薬飲んでたけど、薬ないっていうから、いったんうちに戻って、これともう1匹猫いたんだけど、2匹の猫と犬1匹いて、それ、でも、動物は連れていけないっていわれて、物置に3匹入れて、犬は中のテーブルとかなんか、あれに縛って、猫はそのまま、そんなときはすぐ…。戻ってこれるっていう、そういう安易な考えだったから。ほんで、そのままにして、犬は、でも、集会所に行ったときは連れてったんだかもしれない。今度、車の中で。で、朝になって、「じゃあ」って行って薬持ったり、ちょっとやっぱり中にはリュック、本当に避難のようなリュック持ってきた人もいたから、「そうか、何か持ってこなんねな」と思って、貴重品、本当に、そんなときあった貴重品を持って、それでずっと田村のほうに行ったんだけど。行ったはいいけどね、食べるものも何にもない。まだ本格的にそういうあれじゃなかったから。

フヂノ：最初はおにぎりあったんだけど、その次、水だけになった。私らは水ももらわんがった。ねがったんだ。

光 子：でも、やっぱり、なかには要領のいい方もいらっしゃって、私たちがその場所に着いたときは、自分の身内で固めてちゃんとして、買い物もしてみたいのがあったりして。そんな中で、うちの次男はその前の年、相模原のほうで結婚式を挙げて、マンション買って12月に住み始めてたの。そうしたら、その3月でしょう、地震があったのが。そのときに、メールやっとながって、「なんとかあれして、こっちに来れるんだったら来たら？」っていう話になって、そうしたら、私、行かなきゃって思って、そこから行こうと思ったんだけど。

今度ね、友達とそのお母さんという人は常葉に親戚があって、その人が迎えに来たからそっちに行ったわけ。で、おじいちゃんも近所の人だったんだけど、乗ってたんだけど、家族と別なのよ。避難するときは、なんていうの、家族単位じゃなくて、子ども・年寄りには先に避難だったから……連れてはいったものの、自分たちがどこか行くとき、そのおじいちゃん、私たちが頼ってるのに、どうしようと思って、本当に、後ろ髪引かれるような思いで、でも、しょうがないなと思って、「ここにいたら…」、ちょうどあそこが最初の大熊町のところになったから。「ここにいれば、役場の人たちもいるし、なんとかなるから、申し訳ないけど、私たちはここから行くからね」って言って。

それで出かけたんだけど、そこからまた長かったね。ガソリンはなかなか入れられない、道路は高速使えない。そこで相模原まで行くのは遠かった。ガソリン入れるのに並ばなきゃなんなくて、それも、最初は10リッターだかなんかしかが入れられなくて、1回入れたんだけど、その次、ずっと並んでたから、ガソリンかなって行って並んだはいいけど、もうちょっとでスタンドのあそこに行けるなってなったときに、店の人が台数数えるんですよ。「ん？ もうないのかな」なんて。でも、なんか進んで行って、その場に行ったら、うち、普通ガソリン、レギュラーだったんだけど、「ハイオクだったら入れられます」って。ハイオクも何も何でもいい、とにかく入れなきゃって行ってハイオク入れて、それでなんとか着いたんだけど、で、うちの下の息子はやっぱりテレビとかなんかで情報が入ってるわけよ。私らは何のあれもわかんなくて逃げて行って、だから、マンションに着いたらうちの息子たちが、「ちょっと待って。順番にまず風呂に入ってくれ」と。

フヂノ：でも、着替えみんな買っててくっちゃのな。

光 子：着替え全部買って、布団も来客用の布団なんかなかったでしょう？ 3人分、用意してくれて。

フヂノ：パジャマまで用意してくれて。

光 子：で、その日は寝て、次の日、見たら普通なのよね、向こうは。ガソリンこそなかなか入れられないようなあれはあったけど、買い物ももしかしたら少し少ないかなみたいなの。で、計画停電もあるかもしれない。結局、なかったんだけど。ほんなのもあったけど、別に普通なんだよ。

私たちってマンション暮らしなんかしたことないから。だから、こういうところに入って、うちの中で電話、友達とかなんかいろんな知り合いとか連絡取りたくて電話してたら、うちの中であんまりしゃべってて悪いかななんて思ってベランダに出たの。「ベランダはやめてくれ」って。周りに（聞こえちゃうから）。ほんなこともあるね。

でも、10日くらいはいたんだけど、そのあいだに、うちの主人はそのとき第二原発に入ってたの。その3月11日ごろ。全然連絡取れなくて、どうなってんだかさっぱりわからない状態で、私たちはとにかく避難するっていうことを家のテーブルの上に書き置きをしてきたわけ。書き置きしたけど、うちの旦那の仕事のあれがあるから、日中、明るいうちは来れなかったみたいなのね。気にはなって、川内のほうに行ってみたっていったのかな。夜、なんとか抜け出して。で、うちに行ったら電気ついてないじゃない。テーブルのそんなのあるかなんて全然。でも、友達とこうやってるうちに、なんか物置でガタッと音したんだって。それで、開けたら、猫は外に出ちゃって、犬はつないでるからそこにいたんだけど、猫はそんなとき捕まらなくて。

とりあえず、でも、まだ仕事が残ってたから、うちの主人も、すぐに連れてはいけなくて置いてって、戻って、私たちはそのとき相模原に行ってたから、どうなってること、うちの息子に「会社に電話しろ」って行って、「どうなってっか聞け」って行って聞いてもらって、なんだかんだやってたら、会社としては「とにかく出なさい」っていう…だったらしいんだけど、でも、ここで出てそのままにしてたら第二も爆発するってなって、自

分たちで思って、仲間も、居れない人はしょうがないからあれだっていって、手伝ってくれる人だけ残ってくれって。そう。責任者だったから、一応そのの。

だから、とにかく少し落ち着くまでやって、私たちが会社に問い合わせしたりなんかして、やっと今度、本社のほうから、「とにかく出ろ」ってことになって、やっと16~17日ころだね、連絡取れて戻ってきたの。富岡から相模原に行くまで、とにかく寒いし、食べ物はないし、それなのに仕事してての移動だから、いったん犬を迎えに行っ、それで連れてきたんだけど、なんていうの、疲れきって、疲労がすごいあれで、途中、うちの広野に嫁いだ姉（長女）がいわきにいたのかな。そこでちょっと休ませてもらって、で、そのあとうちの、私のすぐ上の姉（次女）がひたちなかにいたんで、「そこに寄らせてもらったら？」っていったら、夜のうちに家族でみんなでうちの旦那のどこまで迎えに来てくれて、運転も代わってもらったりして、一晩泊めてもらって、それからその娘の旦那さんが会社からちょっとガソリンもらってきてうちの旦那の車に入れてくれて。

やっと、だから17~18日ごろかな、向こうに。そして、相模原着。で、そこで、相模原の息子のところへ1週間ちょっといたけど、いつまでもな、こうやって、本当に4畳半あるか、3畳……そこに3人4人が。だし、「いつまでもこうやっていらんにべね」っていって、うちの主人のお兄さんっていう人が（静岡の）熱海、磐梯じゃない熱海。あっちにいたから、じゃあ、そこに少し世話になるかっていって、行こうと思って準備して、おみやげ買ったりなんかして準備して、「じゃあ、あした行こうね」ってなったときの、その夜に、今度、主人がまた富岡に戻ってこなきゃ、仕事でこっちに……という話になったらしくて、「それじゃ、ちょっと熱海には行けないな」ってなって、で、「じゃあ、どうする？」って。あっちの母の妹さん。

フヂノ：埼玉にいるんだな。

光 子：埼玉の鶴ヶ島にいたんですよ。電話したら、とにかく住むところは見つけてくれてね。

フヂノ：それからまた奇遇があったのな。

光 子：そんなときは一間いっぱいにもなんないぐらいの荷物だったけど、本当に何もなくて行ったから。でも、そこに住むってなったところには、ひととおり一応、テレビもあったし、ベッドもあったし、洗濯機もお風呂もあったとこで、物置だったけども、そこを掃除して、半年いたかな、そう。鶴ヶ島に半年いたの。

フヂノ：その半年いるあいだに奇遇、奇遇っていうかなんていうか、大熊の我家のナシを食べてたっていう人に突然会ったわけな。うちの真ん中の娘（ひたちなかの次女）の友達が、なんせ、うちからナシを送ってた、それを送ってもらって食べてたっていう人に会ったの。会ったのね。そうして友達になっちゃって、その人、私のことかわいがってどこでも連れてあるったんだよ。

そうしたら、その人の友達が連れていったもんだから、どこさでも連れていったもんだから、友達のとこさ行ったら、その人はちょっとしたお店やってたのね。そうしたら、友達が、こういうわけで震災に遭って来たってことを言ったもんだから、そのお店のものを、そこで洋服も売ってたんだね。「洋服を2個だけ自分で好きなの取りなさい」って

その人が親切に言うわけ。そして、そのほか、お金もな、あれは寄付のお金だったな。

光 子：お店の中で義援金を集めてたのね。そして、母が行ったら、どこの誰だかに渡るかもわかんないより、目の前のあれにあげたほうがいいからって言って、その場で。

フヂノ：それ、2万円だよ、私にくれたの。ありがたかった。そして、そのほか、洋服も「好きなの2枚だけ取ってげ」って。

光 子：半年いたら、そのうち借り上げの住宅って制度が……制度がっていうか、できた。「ああ、そうなんだ」って。それは自分で探さなきゃなんないのね、手続きしてね。そこで、なんとか役所に行ったりなんかして、それで、川越の隣に比企郡（ひきぐん）、埼玉県の比企郡の川島町っていうところ、ここは、最寄り駅ってないのね、最寄り駅が川越なの。そこに一軒家を借りれることになって、あっちこち見たんだけど、結局ここになって、そこでは動物飼っても大丈夫って。で、これ（家の猫）を迎えに行ったの。これ、3か月……

一震災避難後は飼っていた猫や犬はどうしたのですか

光 子：3か月たったときに、バスで中に入れる（一時帰宅）ってあったじゃないですか。そのときに、うちのなかにいたの、これ（現在も飼っている猫）。そして、なんとか捕まえて、最初はなかなか来なかったんだけど、なんとなくあれして捕まえて、愛護協会のほうで引き揚げてくれるっていうんで、かご借りて、そこに入れて玄関先に置いてったら連れてってくれて。

でも、ちょっとしたら体調崩したみたいで、梁川のほうの動物病院に行くことになったらしくて、問い合わせしたら、そここのところに行ったっていうんで、埼玉のその川島町から梁川まで迎えにそのときは主人はいわきから仕事に行ってたから、いわきで合流して、それから迎えに行ったんだけど、川越っていうか、あっちに、川島に着くまでずっと鳴き通し。よくそんなに鳴けるなっていうぐらい、「ニャーニャー、ニャーニャー」。で、そういう（広い所で育った）猫だから、うちの中にじっとしてられないって。ちょっとのすき間があればしちゃ抜け出して、逃げちゃって。

フヂノ：探すの大変だったな。

光 子：で、ここよりもちょっと、一軒一軒狭いとこなんだけど、一歩出たら隣のうちじゃないですか。だから、そこにいるってわかってても入っていけない。これは逃げるし。ハハハ。やっと捕まえてね、せっかく連れてったのに、事故に遭ったりしたら嫌じゃん。大変だった。それで1年半ぐらいいたかな、そこに。

フヂノ：そんなときは犬もいたからな。

光 子：そう、それで、主人も息子もいわきに来て仕事してたから。やっぱりこっち戻るしかないなってなって。

フヂノ：ここ（現在の家）を買った。

光 子：うちの主人は、下宿屋にいて、息子はアパート借りて。何回かここに来なっきゃなんない、いずれにしたって、そんなときに向こうに……

フヂノ：上神白。

光 子：仮設住宅。そこんところを借りて。来た時はそこに泊まるみたいなの。それで、そのうちを建てた。

フヂノ：今現在の。

光 子：だから、内緒よ。ここ、一坪だいたい20何万ぐらいしたのね。私たちだいぶ安く買いました。早かったから。震災前ってちょっと建築関係が不景気で、あんまり高くなかったのね。で、売れ残ってた場所なんだね、ここら辺。いっぱい空いてたの。

だから、ここ一応、2区画買えたの。そのあとから、「現在、2区画はちょっと」って感じで。このうち、段差のいちばん少ないところを買ったわけ。1番……まあ、そこらは早かったね。「ちょっと早いんじゃない？」っていう話もしてて、向こう（埼玉）でも「どうだい？」っていう家もあったんだね。でっかい家。というか、私たちが、鶴ヶ島で住んでたときに、持ち主だったうちの人が、東松山じゃない……なんかにでっかい家を持ってたの。そこ、ちょっと建築途中だったんだけど。

フヂノ：銅板葺きの屋根だったな。

光 子：すぐ前にモーターもあって、「そこもコミでどうだい？」っていわれたんだけど、うちの旦那、家自体はちょっと気に入ってたみたいなんだけど、でも、あれだ……（埼玉は遠いし、）仕事環境もあったから、やっぱりこっちに来るしかない。

フヂノ：熊谷のそばだったもんな。

光 子：そうだね。4人一緒で、息子もまだ今から10年も若かったから、「これから結婚できるかな、奥さんも来て子どももできるかな」って思って。2階あげて、（二世帯風に）2階にちょっとしたキッチンやら。それが、今……ちょっと持て余し気味。

ーナシ畑は現在どうされてるのですか？

光 子：ナシはずっと離れちゃったけど、何かの縁で、Hさんたちが借りてくれることになって。荒らさないで済むんだなって感じで。

フヂノ：宅地はソーラーやってるしな。

光 子：シートによって、その分、ちょっと熱量っていうか、あれが上がるらしい。ふくしまエナジーさんの会社のやつはそれやってるんですよ。ただの防草シートなのかと思いきや、そうではなくて。

ーナシの伐採はいつしたのですか？

光 子：それは、家を壊したりなんだりするときに。そのタイミングでみんなおまかせでやってもらったから。震災前には「うちでできなくなっかな」っていうんで、「壊すときお金かかっから、それは残しておかなきゃなんないね」なんて話でいたんですけど、全然お金はかかんないで壊した。いわきに来てからだね、ナシ畑とうちを壊したりなんだりしたのはな。うち壊すときはあれだったけども、お墓のほうが面倒くさかったね。

フヂノ：お墓も移動したからな、

光 子：いわきに持ってきたから。で、まだちょっと早い時期に。何でもうちの主人は早くしてたんだね。で、いろいろ面倒くさい交渉もあったみたいね、東電とあれとの。まだ放射性物質の関係があって。そう。解除にならないうちにやったから。

フヂノ：釣りしてて友達になったんだ、お坊さんと、お寺さんと。ハハハ。

光 子：でも、今つくってあるところも、同じ宗派ではあるんだけど、檀家にはなっていないの。檀家はもともとの小高にあるお寺のほうなんだけど、ちょっと複雑な感じで、いずれはこっちに檀家移さなきゃなんないかな、なんては思ってたけど。でも、もともとあったお墓と同じぐらいの大きさでこっちのほうにつくるってなって、「そんなに大きくしなくてもいいんじゃないの？」みたいなことあったんだけど。やっぱ自分がお婿さんっていうあれがあったのかな、「自分の代で小さくできない」って言って見え張ったんだな。

それで、でも、大熊にある石も使えるやつは使いましょうって。それ、出すのもちょっといろいろ手続きっていうか、測って、いろんな許可をもらってみたいのがあったんだけど、それやって、こっちに持ってきてお墓を建てました。で、そのあとでいろんな補償があって、東電さんに言ったら「お墓は150(万円)です」って。とってそんなんじゃないから。なんか、その倍以上かかる、3倍ぐらいかかったから、なんだかんだ。

「え？」って東電にだいぶ交渉はしたんだけど、「いや、そういう決まりです」っていわれて、うちの主人の代では、いるうちは、それはそれで終わっちゃって。終わっちゃったんだけど、町健康診断あったときに、よく、ADRだけ？ 損害賠償のあれをやってるところ、あそこの人が来て、「何か相談事ありませんか」みたいな雑談してる中で、実はこうやってお墓をこっちに持ってきたんだけど、150しか出なかったし、ずっとそのあとでうちの主人が亡くなってからだな、大熊のお墓を更地にしなきゃならない。壊したまんまで置いといたから、しばらく。だけど、この先、解除になってそういうふうになったときに、新しく入人があるかもしれない。そのときにやっぱりちゃんときれいにしとかないって話になって、で、更地にしたら、それも50万ぐらいかかった。

「えー、どうしよう」と思って、その話をしたの。

そうしたら、「じゃあ」って言って、「出るよ」って。それでいろいろ、ちょっと面倒だったけど、とにかく「同じ大きさなんだよ」って、「そんなに大きくしたわけじゃないんだよ」っていうことを証明するのに、昔はそんなわざわざ写真を撮らないじゃないですか。大きさもそんな測らないでしょう？ それを証明するために、写真ひっくり返しひっくり返し見て、そうしたら、うちのじいちゃんが亡くなったときかな、そのときにお墓で線香あげてる所なんか撮った写真があって、それとうちのお墓とこうやったりして、やっとなんとか認めてもらって出るようになって。こっちのお墓やったの、うちの主人がやってるから、私はあんまり、いくらかかったとかどこの石屋さんでどうのこうのっていうのははっきり覚えてないわけ。だから、お寺さんに行って、「うちのお墓ってどこの石屋さんで建てたかわかりますか？」って聞いて。だけど、あそこ建ててから5～6年以上過ぎるから、主人が生きてるうちだから、もう6～7年になるのね。なもんだから、データが残ってないとかなんとかなんていう話をされて。でも、なんとか認めてもらって

つくったけど、今になって、やっぱり、まだ町の公営墓地だっけ？ 大熊の昔からのお墓、ずっと町外れの、「あそこからちょっと出したいんだけど」っていう人がいて、「でも、150 だよな」ってやっぱりいわれて、「私たちはこうやって、こういうところに相談したら出たよ」って言って、「じゃあ、その手でやりましょう」なんていう話になって、まだ、だから、そのままの人もいれば……

フヂノ：今は新しいお墓あるもんね。

光 子：移動した人もいるし、だから、こっちに持ってきた人はまだ少ないかな。

【第2回インタビュー】

—光子さんの小さい頃について教えてください。

光 子：私は兄弟が3人で、一番下なんです。上と四つぐらい離れていて、長女とは六つ離れているんです。だから、兄弟には遊びの相手にならなかったみたいで。近所にちょうど同じぐらいの子というと、男の子ばかりで、男の子と遊んでいました。

昔ながらの木登りしたりとか、チャンバラやったりとか。チャンバラ分かります？あとは、ちょうど今ごろになると、田んぼに稲わらが置いてあるんです。脱穀したあとの稲を、まだ片付け切れないやつが置いてあったりして。それで基地作ったり、その中で相撲を取ったり、そんな感じでした。

うちのナシ畑の下にちょっと下りて、熊川の川に下りるところが、やぶの中にあるんですけど、やぶのちょっと下の所に沢が、清水が湧いてて、そこでサワガニがいっぱい捕れて。よくそこでサワガニを捕ったりしてました。ぐるっと回ると大変だから、やぶの中を通って。子どもの頃、何人かで川まで下りて行って遊んだりとか。

道、今は舗装になって綺麗になってるんだけど、昔は砂利道で、あまり広い通りでもなかったんですけど、その所に家があって、通りの間に木が、防風林があったんです。そのすぐ脇に物置があったりして、木から登って屋根に上がって、スズメの巣を見たり。そんなことやったりはしてました。わりとうちの中で、ままごとというのはなくて、外で走り回ってた。

ナシ畑やってたから、今ごろになると親が剪定（せんてい）して、その剪定した枝で馬を作ってくれたり、刀作ってくれたり、それで遊んでた。あと5月6月ぐらいになると摘花、実すぐり。ナシがいっぱい実が付くんで、そのまま置くと実が大きくなるから、そのなってるところを一つにする。そうすると下に実がいっぱい、畑に落ちるわけです。その実を、このぐらいの実なんですけど、それを使って絵描いたり、文字書いたりして遊んだりとか、そういうことはやってました。

あとは、学校の夏休みで。どこかのうちに集会してラジオ体操を朝やるんですけど、そのときだけ女の子もそこに来るから、そのとき女の子と遊んだ。父親の機械やってるのに、それに乗っかってみたりとか。隣近所、田んぼですから。いま考えると、とんでもないことやってたんだなと思って。うちの裏にあった田んぼというのは、持ち主がちょっと離れた所から来てたんです。いないから勝手にそこを。

一学生時代はどのような感じでしたか？

光 子：小学校は、今あるインキュベーションセンターになってる所が小学校なんだけれど、私が小学生のうちはまだちょっと西側にあったんです。いま幼稚園になってた所なんです。大野幼稚園というところがあって、そこに小学校の頃は通ってたんですけど、途中がちゃんとした道路じゃなくて、田んぼのあぜ道みたいな所。山道ですね。そこを通ったりして途中遊びしたりなんかして。田んぼと畑があって、道路もそんなによくなかったから。小学校は特に。

大野小学校って田舎の小学校だから、校庭が第3校庭まであって。平屋の小学校なんだけれど、第1校庭、第2校庭、第3校庭があって。校舎のすぐ前が第1校庭で、脇のほうにちょっとあって、そこでは外でやるバスケみたいな、ポートボールとか何とか、そういうのができるちょっとした校庭があって。あと門を出て脇にすぐ。そっちは結構広い校庭で第3校庭だったんだけど。あっちが第2だったかな。そこでは運動会をやったりとか、大きな大会。みんなで何かやるときにはそっちで。最近はまだ宅地になっていて、その校庭はなくなったんだけど。

校舎のすぐ前の校庭にはイチヨウの木がだっとなっていて、その脇に鉄棒とかあったんだけど、鉄棒、結構遊んで、一度、落ちたら肩の骨が外れちゃってなんていうこともありました。

中学校は、私らが行ってるときは、大野中学校と熊町中学校というのが別々にあって、いずれ合併するみたいな話はあったんだけど、私が行ってる間にはなくて。だんだんと大熊中学校の大野中学校、熊町中学校、みたいなのがあって。私たちの子どもの頃ですね、ちゃんとした大熊中学校というのができて。

大野中学校のときはバレーやってたんですけど、バレーって、いま体育館の中でやるじゃないですか。外。外なんです、基本。中学校の大会、中体連っていうんですけど、それのときも外でしたね。中でやるということはない。体育館の中は、バスケットがわりと強かったものだから、バスケットが占領。バスケットとバドミントン。中2階のほうで卓球やって。私たちはもう、外。

だから、始まる前にまず石拾い。向こう側のほうに野球部があるから、時々ボールが飛んできたりして。あの頃みんな9人制のバレーボールは外でした。それが普通だったから。何とも思わなかった。ちょうど常磐線が通ってる線路のすぐ脇に、そのバレーのコートがあったりして。放課後、部へ行ったら石拾いして。危ないから。

1年生の校舎と3年生の校舎とつながってた。ここに電線があったんですけど、そこにへビが絡まって。うちのすぐ裏の男の子なんですけど、へビ大嫌いなんです。私も嫌いなんですけど。体育館がもう一つこっちにあって、体育館があって、こう並んで、この辺にいたんだけど、そっちに体育館のほうまで逃げたりして。

先生も昔は緩かったんです。宿直室みたいなのがあって、そこで麻雀やったりなんざしてました。（中学校は）震災前の役場、あそこが中学校。あその線路のすぐ脇が学校だから。自転車（通学）です。本当は直線のあれで、2キロ以内は歩いて行かなきゃなら

ないんだけど。ずっと回っていくと2キロ以上あるからって。ちょうどこっちの五差路からずっと下がった所に川があるじゃないですか。あそこら辺で区切られたんです、自転車の人とそうでない人と。もう少しこっちだったら自転車だったし、ここ曲がってこう入ったくらいがこの橋までの距離だ、みたいな感じで、勝手に言い訳して。今というか、震災前の中学校だと、ずっと2キロくらいあったんだけど、その手前に中学校あったから。

ちょうど役場の、通りに入る辺りにテニスコートがあつたりして。結構広く校庭があつた。中学のとき、あまり思い出って。でも中学校1年生のときの担任の先生って、結構、愛情の手とかいって、悪いことってというか、何かするとげんこつ。別にそれって、今で言うとお大変なことなのかもしれないけど、昔は別に。

英語の先生だっけかな、あの先生はわりと厳しくて、宿題忘れたり何だかやって来なかったりすると、廊下を乾拭きでかけさせられたり。結構、体罰がありました。だからその英語の先生とかは、竹刀持って。でもなんか懐かしくて、みんな、なついてたというか。面倒見よかったのかな。バスケットの顧問をやってた。

昔って、先生、何かかにか顧問をやらなきゃならなかったんだよね。運動クラブというか。ろくに競技のことを分かんなくても、やらなきゃならなくて。うちのバレーの先生なんては、ろくに分かんなかったんじゃないかな。来たり来なかったり。竹刀持って歩いてた先生はバスケで、厳しくやりました。だから学校としてはそんな感じ。

私ら小中学ぐらいまでは、卒業式というと親が来て、謝恩会というのもやりました。酒が出て。私らのときはあまり出なかったのかな。私の一番上の姉のときはお酒が出て、飲んで、私の父親は事故を起こした。あのときは車、バイクかな。よそんちの塀にぶつかって。そういうことやってても、昔お巡りさんに何か聞かれたり何だりしても、文句言ったりして、結構。言っても、免許証は汚れなかった。そんなだった。

あそこら辺は何だろう、いま何だったんだろう、サンフーズあつたの分かります？客神とか何かがあつた辺り。あそこの前辺りってというか、あの辺に駐在所があつたような気がしたけど。高校は浪江まで通ったから自転車で駅まで行って、それから電車で行って、また歩いて2キロぐらい自転車で行って、降りてからまた、今の浪江の道の駅、あそこの反対側に役場の体育館みたいのあるじゃないですか。あそこが浪江高校の体育館だった。でも小学校も私行った所に場所なくなつたし、中学校も場所なくなつちやつたし、高校もなくなつちやつたし。別の場所に移転しちやつて。ちょっと山のほうに、山側というか、あっちに行つちやつたから。

高校の夏休みに車の免許取つたんだけど、私が通つたときは、免許取るの禁止とかないとかってなかつたんです。6月生まれだから、夏休みに試験受けられた。夏休み取つて、卒業式の頃、あれ高校のときかな。車で行つたような気がする。親も行ったんだけど、なんで車乗つてたんだろう。でもあの当時は福島まで、庭坂っていう所、あそこまで免許取るのには行かなきゃならなかつた。庭坂でもやるけど、そこでなくても、郡山でも行けるしあれだけ。そして庭坂に行くのにも、浪江からまたバスに乗つて行かなきゃならなくて。結構、泊まりがけで行つた。行くんだけど、前の日に行つて、泊まる所で講

習会が、夜やるんですよ。そこで講習会やって、一応、1回で受かったけど、受からない人はまたそこで泊まって。民間のところだったのかな。庭坂の免許を受けられる所の外側にあったような気がする、泊まれるところが。（今は）ないんじゃないかな。いま便利になってる。泊まらなくてもみんな。昔ってみんなマニュアルだから、オートマは「身体障害者の車だよ」みたいな、そんな感じだったけど、だんだん今は、マニュアルは希望しないとないですもんね。だから、マニュアルでも何でも運転はできる。それで覚えたから。

—結婚までの経緯を差し支えなければ教えて下さい。

光 子：東電の中で事務員さんよく募集してたってのがあって。「ナシの暇な時期に、少し行ってみるか」みたいな、そういう感じで、ある会社に事務員として行ったら、隣にいたのが、その（今の主人）。1年もいたかないかぐらいだったんだけど。

うちの主人って、生まれが横浜の鶴見区なんですけど、出張で来てて。その頃、私は兄弟3人で一番下で、もう上2人いなくなってたから、私はうちを継がなきゃなんないみたいな雰囲気です。そうしたら、うちの主人のうちでは「お婿さんは駄目だ。お婿さんにはやれない」って「どうしたもんかな」なんていろいろやって。そうしたら仲人さんという人が、ほとんど頼まれ仲人みたいな人なんだけど、「結婚したいのか、それともどうなのか」って聞かれて、「結婚したいんだったら、とりあえず籍を、私がお嫁さんに行くような形でやったらいいんじゃない？」っていう話になって、いったん私はお嫁に行きました。戸籍上だけ。

息子が生まれるようになって、そして、子どもが、名前が途中で変わったりするのもあるからって言って、籍を持ってきて。あっちの親に内緒で。向こうは兄弟やっぱり3人いて、別に跡取りではなかったから。主人は海外出張とか多くて。一番最初に行ったのがサウジアラビアなんですけど、そこに行く前にかな。名前変わって。向こうに新しくもう伊東で行ったから、もう仕事先で、そっちでは伊東で通って。こっちにいるときの知ってる人は池谷っていうんだけど。「池谷さん」という感じでいたんだけど。ただ、向こうに行くと、向こうの親に内緒でやっちゃったから、いつばれるのかというのがあって。

それで、向こうのお母さんという人が、わりとたまに息子の会社に、連絡を入れる人だったんです。そのときにばれちゃって。お父さんというのがちょっと昔気質というか、わりと頑固な人だったから、大工さんの棟梁をやって。「じゃあ、お父さんには内緒にしとこう」ということになったんです、結局は。ばれて「どういうことだ」と言われながら。お父さんに言うと大変だから、お父さんには内緒にしとこうということになって、言ったんだけど、今度子どもが大きくなると、「お名前は？」なんて言われて。当地で言われると困るから、名前は名前だけを言わせるように。「伊東 OO っては言うなよ」みたいに、そこまで「名前は？って聞かれたら OO だって言えよ」みたいに。そんなことしてましたね。

だって、お父さんだけだから、知らないのは。そんなことやってたけど、うちの娘が事

故でなくなったときに、ばれてもおかしくない状態なんだけど、お父さんがあまりそういうことに、言わなかったのね。お骨も伊東家に入れてるし、伊東〇〇で出ますよね、お葬式だから。でもあまり、何とも言わなかった。でも自分ちに帰ってから、「なんでお墓、伊東家に入れたんだろう」みたいなことは、向こうの家族に言ってたらしいですけど。「でも一緒にこっちに住んでるから入れたんじゃないの？」っていう感じにしてみたんだけど。ばれてた、分かってても黙ってたか何だか知らないけど。大ごとにはならないで。そんなでした。

一伊東家の祖父母とご主人との関係はいかがでしたか

光 子：ほとんどいなかったから、出張で。結婚生活の半分近くいなかったんじゃないかな。海外。日本に帰っていても長崎にいたし、三重県のほうにもいたし、北海道にも行ってたし、青森にも行ってたし。そこに遊びに行くのが楽しみといえば楽しみだったんだけど。行った先々に。海外は、最初行ったのがマレーシアかな、私が遊びに行ったのが。サウジアラビアには行きたいと思わなかったです。

あそこは、お酒は絶対持ち込めないし、飲めないんだよね。女の方はベールしてるから、ふざけてこんなやったら大変なことになった。交通事故で現地の人をひいちゃった人がいて、そうしたら、目には目を、歯に歯じゃないけど、自分の子どもをやられてしまって、おかしくなっちゃったという人もいたみたい。例えば何かちょっと法律に関わるようなことしちゃった、捕まったら、今度、その先がどこに行っちゃうか分からないんだって。だからもう、大変なこと。そんな所に行ってたのよ。タイには行った。あと、ベトナムとかも遊びに。ベトナムのときは息子二人連れてったかな。

あとは、マレーシアのときは1人で行ったんだ。まだちっちゃかったけど、うちの親に預けて。

一震災が起きたとき、ほかのご家族の状況を教えてくださいたいです。

光 子：うちの旦那さまは第二原発の中で働いてて、息子は第一原発に入って仕事してたんです。ただ、地震があったときに、そのとき帰ってきたの、息子は。

第一原発から、あの日に帰ってきたんです。息子はそのとき風邪ひいてて。一応、犬と猫を連れてったのかな。車の中でいたんだけど、次の朝になってから、もう避難しなきゃならないとなって、「じゃあばあちゃんの薬持ってこなくちゃとか、何か持ってこなくちゃ」なんていう話してて、いったん戻ったの。でもそのときって、もう爆発してんだよね。次の日の朝だから、もう。

子どものときから安心安全の原子力発電所だったから、もうインプットされてて。それで、すぐに、「そんなにかからないで帰ってこれるんだろうな」ぐらいの感じなんだけど、なかなかバスが来なかったんです。じゃあ、ワゴン車、そういうのがある人は乗り合いで、まずお年寄りとか子どもさんを先に避難させましょうということで。とにかく、どこに避難しなきゃいけないんです。とにかく西へ行ってください。発電所が東だったか

ら、とにかく西へ行ってくださいと、みんな連なって避難したんだけど。いったんどこかに身を寄せたら、バス、いったんワゴン車戻って来て、また残ってる人を連れてってくださいという、そういう話で最初行ったんだけど。

体育館で、たまたまその田村の体育館が、大熊町の役場が行ったところで。そこに一晩いたんだけど。その日のその夜にか、爆発がどうのこうのあったのが。うちの息子は東電のあれの中で仕事してたから、仲間から連絡が入ってたみたいで。もしかしたら、今晚のうちにも、ほかにどこか行かなきゃならないかもしれないようなことを言ったんだけど。とりあえずその日の夜はそこで過ごして。

だけど、その体育館の本もとというか、あれが、大熊町の役場の人たちが陣取ったものだから、配布するものを、大熊町の人だけっていう感じだったんです。そのとき、他の町の人が近くに居ただけどその人たちは何ももらえない、そういう感じだったから、とても嫌だった。同じ大熊でも何ももらえなかったんだけど、結局は物がなくて。

その日の夜か、次の日か、朝、やっと相模原の息子と連絡が取れて、「できるんだったらこっちに来たら？」ということになって。そのときは言ってくれたことがうれしくて、じゃあ行かなくちゃって。行かなくちゃはよかったんだけど、一緒に行ったおじいちゃんが、家族がどこにいるか分かんないです。別に来ちゃったから。家族がそのあと、どういうふうな所に行ってるかが、連絡が取れなくて。一緒に行って私たちに頼っててくれてあれしたんだけど。でも、息子の所に行くには、一緒には連れていけないじゃないですか。もう、すごい葛藤が。どうしようって。謝るしかないなみたいな感じで。「申し訳ないけど、こうやって行くから、ここにいれば大熊町の役場の人たちもいるし、何とかあれだから、申し訳ないけど行くからね」って言って。そんな感じだった。

別のあと2人の人は、常葉に親戚があったから、その常葉のほうに夜のうちにいくって言って行ったから。とにかく寒かったね、あの時は。

ー常葉に親戚がいた人たちは一緒に避難しなかったのですか？

光 子：一緒には行かなかった。たまたまそのとき親戚の方が、連絡取れたんで迎えに来るって言われて、迎えに来てもらって行ったんだよね。だからそっちはよかったんだけど、おじいちゃんが1人になっちゃうって言って、なんだか切なかったです。

ーガソリンを給油するときなどのお金などはどうされたのですか？

光 子：ちょうど3月で収穫上がりだったんです。ナシの収穫、米の収穫があって、米の収穫のあれはみんな農協さんに直接振り込んだりなんだから、ナシの自分ちで売ったやつは、まだ積まないで、手元に少し残って持ってたんです。うちの下の息子にお金を貸してたやつが。暮れの頃にある程度、まとまったお金を返してくれたんです。それを積まないでいたから、とりあえずそれは持って出たんで、ガソリンを入れるとか何とかっていうときに、お金何とかあったんで、それはよかったんだけど。

一晩体育館にいたときは、「まあ、泥棒はいないと思うけど」って気持ちは。現金持っ

てんだなって。（避難の）そのときは一応、通帳と印鑑と現金と、あっただけ（の現金）は持って。あとこまごまとしたのは、そんな急に、どこにやったかなっていうのもあったけど。持って出ただけ。

困ったのが、農協の通帳と印鑑とは持って出ただけ、埼玉に結局行ったときに下ろせなかった。同じ農協なのになんてと思ったけど、やっぱり管轄違いなんです。それ持っても下ろせなくて、どうしようって。ちょっと長くなりそうだし。そのときに、向こうのほうの信用組合からだと同じ信用組合、うち信用組合ともつながりがあったから、それだと10万までは下ろせるといったかな。

それを下ろすのに2時間も3時間もかかって。1時間近くかかってそこまで行って、そこでまた1時間、2時間待たされて、やっと10万下ろせたという感じ。通帳と印鑑じゃなくて、カードがあれば下ろせたんです。だけど、便利だったというか何というか、毎日のように農協さんとか信用組合の人が、何かあればすぐ来てくれたから、行かなくても、カードがなくてもそんなに困りはしなかった。大熊にいるうちは。

だから、たまたま専従者給与って、ばあちゃんと私、もらうようにしてたから、青色申告をやって、伊東果樹園から給料を二人でもらってたの。それに対してはカードを作ったんだけど、そこにはお金入ってなくて、あまり。だから、カードあっても通帳にお金がなかったり、通帳と印鑑持ってもそこで下ろせなかったりして、少し震災のあれも落ち着いた頃に福島まで戻ってきて、下ろして。その下ろす額も限られて。100万は下ろせなかったんです。九十何万だったかな。わざわざ来ないと下ろせないし。いろいろそういうことでは大変だったけど。

でも息子の所、相模原に行ったときは、物が普通に売っててびっくり。いま石川のほうで大変な思いしてるけど、うちらは本当に普通に生活してるじゃないですか。そんな感じなの。ただ、ガソリンは並ばないと変えないなんて感じはあったけど。計画停電もあるかもしれない。牛乳とかそういうのはなかなか買えないとか。でも計画停電は、結局なかった。

一いわきのおうちを建てるときに、どういった経緯で建てることになったのですか？

光 子：あちこち探して、「うちな、そうしたら木のうちだから、住友さんか？」なんて私が言ったのがあったりもして、住友さんに連絡したら、ここを紹介してくれたんだけど。ちょうどというか、震災前って、大工さんとかそういう建設会社がすごい仕事のない時期だった。だから土地も、ここでも売れなかったんだね。

農協さんの家財とか何かの保険に入ってる。火災保険とか。それが、別に火事になったわけでも、全部壊れたわけでもないけど、放射能の関係で、どうせしばらく入れないというんで、満額下ろされたんです。そのお金があったから、もう使っちゃったらあれだから、土地を買おうかってなって、ここの土地になったんです。

いろんな難しいことはあります。震災で変わっちゃったからあれなんだけれど。大熊にいる頃は、のほほんと。子どもも畑の中で走り回ってやってたけど。親が走り回ってたか

ら。それなりに楽しかったかな？

以上